OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学文学部国文学研究室蔵 後鳥羽院御集（翻刻）二
Author(s)	山本, 一; 佐藤, 明浩
Citation	語文. 1985, 46, p. 50-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68739
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学文学部国文学研究室蔵

後鳥羽院御集（翻刻）二

山本一・佐藤明浩

詠百首和歌（ママ）

春百首

六〇一　うちなひき春はきにけり。朝またき昨日にかはる嶺の白雲
六〇二　まかねふくきひの山かせ打とけて細谷川も岩そゝくなり
六〇三　みよしのゝ滝のいとものとちこめし川との氷けふやとくらん
六〇四　天にますとよをか姫のゆふかつらかけてかすめるあまのかく山」35ウ
六〇五　天の戸は所もわかすかすみつゝ宮もわらやも春は来にけり
六〇六　消やらぬ雪まにねさすかた岡の草のはつかに春めきにけり
六〇七　よしの山今朝はみゆきも消はてゝ霞にたゆる岩のかけみち
六〇八　みよし野の松の葉しろき山のはにかゝりもやらぬうす霞哉
六〇九　しからきの外山の空はかすめとも峯の雪けは猶分（本ノ）ゆらん
六一〇　今朝こゆる春の行手にかすみけり音はの山の鶯のこゑ
六一一　春の日になをさえ残る沼水や袖のこほりのためし成らん
六一二　いせ島やいちしのうらの蜑乙女春をむかへて袖やほすらん
六一三　春はまたあさゝは水の袖ぬらし摘やね芹の猶こほりつゝ
六一四　朝またきたかためとしも若菜摘野沢の草はむすほゝれつゝ」36オ
六一五　君かためをのゝあれたをふみ分てえくつむ袖やかつこほりけん
六一六　梅か枝をおれはこほるゝあは雪はをのれも匂ふ心地こそすれ
六一七　あらち山やたのゝ野辺も春めきぬ峯の淡雪きえやしぬらん
六一八　山ふかみとはれんとはた思はねとかきほの梅のしるへかほ也
六一九　生駒山いとひし雲はなけれとも霞そかくる春の明ほの
六二〇　みわたせはなたのしほやの夕くれにかすみにかゝる奥津白波
六二一　うちなひき春のくるてふ色なれや霞にめくむ青柳の糸
六二二　新後撰から衣竜田川原の川風に浪もてむすふ青柳のいと
六二三　そてたれてたかかたみとはわかすともけふやつまゝしみねの早蕨
六二四　としへたる浜まつかえの手向。草はらはぬ色も春はみえけり」36ウ
六二五　百千鳥さえつる春はあさみとり野への霞に匂ふむめか枝
六二六　梅かゝのそれかと匂ふ夕へかなたか袖ふれし名残成らん
六二七　猶さゆる雪につゝめる声なから梅かえわきて鶯そなく
六二八　ものことにあらたまりゆく春雨にいとゝふりゆく我そ物うき

六二九　まつらかたもろこしかけてみわたせはさかひは八重の朝かすみ也（けりイ）みかも

六三〇　すみ染の袖に匂ひは移る共おらてはすきしのへの梅か香

六三一　にははすは誰かはゆきてたおらまし霞も八重の野への梅かゝ

六三二　なかむれは霞も浪もはてそなきすまのせきやの明ほのゝ空

六三三　うちわたす遠方人の袖なから霞にこもるよとのつき橋

六三四　梓弓をして春雨いるかたもさたかにみえぬ春の夜の月」37オ

六三五　うくひすをさそふしるへの春かせも花のあたりは猶もよかなん

六三六　鴛のこそのやとりの梅かえにかはらぬねこそ袖はぬれけれ

六三七　袖ふれてたかためとしはわかすともけふやつまゝし峯の早蕨

六三八　竜田山花にあらすとも誰かみむ桜かえたにかゝるしら雲

六三九　なかめてはいかにかもせんわきも子か袖ふる山の春の明ほの

六四〇　みよしのゝ月にあまきる花の色に空さへ匂ふ春の明ほの

六四一　いとふへき方こそなけれ久かたの月をへたてぬ花の白雲

六四二　をはつせや霞にまかふ花の色をふしみのくれにたかなかむら

六四三　猶きかはまれなる人もとひこかし山桜とのはるのゆふくれ（なを）

六四四　ときは木のたえまに匂ふ山桜まれなる色にめかれやはする」（ん）

37ウ

六四五　春ことによし野のたけにかゝる雲のこゝろ空なる山桜哉

六四六　難波かたかすまぬ波の明ほのにをのれはるなるあまの釣舟

六四七　みよしのゝとやまにはなのさきぬれは春そ絶せぬ滝の白糸

六四八　しる人も花より外はあらし吹身は山なからいくよ経ぬらん

六四九　明やらぬ月のかけさへ匂ふかなはなのあたりの春の曙

六五〇　山路わきて手折桜の夕露にぬれてそかへる花のかたみに

六五一　面かけに夕ゐる雲しまかひけんたくひをよはぬ山さくら哉

六五二　みし人の心うつろふはなの色にたかことよりあらしたつらん

六五三　咲あまる花のかけもるみよしのゝ朧月夜に匂ふ山かせ

六五四　昔たれあれなん後のかたみとて志賀の都にはなをうへけん」

38オ

六五五　箸たかをすゑのゝはらの桜かりしらふにはなの色をまかへて

六五六　風雅あたら夜の名残を花に契をきて桜わけいるあり明の月

六五七　続後拾朝またき霞もやへの塩かせにゆらの戸わたる春の舟人

六五八　たつねこしまきの遠山の朝ほらけ家路もみえぬ春霞哉

六五九　新拾あかしかた春こくふねの島かくれ霞に消るあとのしら浪

六六〇　たにふかみかすみにとつるまきの戸を春のたよりにたゝく山風

六六一　煙たつ室の八島はしらねとも霞そふかきをのゝ山さと

六六二　帰雁かすはたゝすやなりにけん山とひこゆるかすそすくなき

六六三　今はとてはやくもかくれ行かりは秋こしつらやかはらさるらん

六六四　今はとてたかあかつきをうきものと晨明の月にかへるかりかね」38ウ

六六五　春といへはかくてもたゆき玉つさの契むすはて帰かりかね

六六六　うら人も難波の春の朝なきにかすみをむすふあみのうけ縄

六六七　風伊せ島やしほひのかたの朝なきに霞にまかふ和かの松はら

六六八　心あらん人の為とやかすむらんなにはのみつの春の明ほの

六六九　さゝ竹の大宮人の恋しきにかさすさくらをかたみにやみん

六七〇 花にあかぬなけきはかりに年を経し昔も猶や袖はぬれけん
六七一 (統千)芳野山くもらぬ雪とみるまでに有明の空にはなそちりける
六七二 久方の天きる雪のこゝちして霞よりふる山さくら哉
六七三 山姫のかすみの袖やしほるらん花こきたれて春雨そふる
六七四 馴ゆくはうき世なれはや御芳野の山の桜もあかて散らん」39オ
六七五 三室山神のしらゆふはるかけておしめとあたの花はたまらす
六七六 志賀の山はなのした行たひ人のすけのを笠につもる白雪
六七七 春雨のふるは涙とちる花をおしみもあへぬしかの山こえ
六七八 浪もせになかれもやらすよしの川をのかかけたる花のしから
み
六七九 (新後拾)くもゐなる高まの桜ちりにけり天津乙女の袖匂ふまて
六八〇 吹にほふ花のつまとはしら雲のいつやまのはにかゝりそめけ
ん
六八一 みよしのゝきさ山きはにちる花は松につもれる雪かとそみる
六八二 すみすてし人さへつらし山かせに桜みたるゝしかの山さと(ふるイ)
六八三 ふりにける吉野の宮の桜はなひとりちるともたれかしのはん
六八四 いとふとや人はみるらんかり衣さくらの雪に袖をはらへは」39ウ
六八五 よしの河岩こすたきもたえぬへし嶺のさくらに嵐吹比
六八六 これまてもうき世にとまる心かなあたなる花のちるを詠て
六八七 つみにこんをのゝ芝生のつほすみれわかむらさきの露にぬれつゝ
六八八 わきも子か袖のつますりいかならん浪に色こきかきつはたかな
六八九 玉川の岸の山吹かけみえて色なる波にかはつなくなり
六九〇 款冬の花の露そふ玉川のなかれてはやき春の暮哉
六九一 山吹のはな色衣さらすてふかきねや井手のわたりなるらん
六九二 春雨にぬれつゝおらんかはつなくみつの小川の山吹のはな
六九三 都人今もこしまの山吹に浪おりかくる宇治の川なみ
六九四 しるておる袖さへふかく匂ふらん藤のうら葉につたふ春雨」40オ
六九五 山姫のはなの袂やしほるらんくれ行春のあかぬわかれに
六九六 咲のこる花のかたみをおもふにも心のつまにかゝる藤なみ
六九七 山の井のあかても春そくれにけるむすふしつくに影をとめな
ん
六九八 大方のなかめは春にかきらねとけふのこよひそ袖はぬれける
六九九 なこの海のいり日をあらふ浪の上に春の別の色をそへつゝ
（一行分空白）
夏五十首
七〇〇 夏衣けふたちぬともつけやらんかせのたよりをしる人もかな
七〇一 たけしまの波のよるかとみゆる迄かきねをこえてさける卯花
七〇二 布さらす八十宇治川の里人のやとにまかひてさける卯の花」40ウ
七〇三 おもひいつるその神山のもろかつら昔をかくるつまとなりぬる
七〇四 くれし春たなゐの水にたねまきし苗代かきは今やさすらん
七〇五 大空のひかりになひくあふひ草いつまてかけしかさし也けん
七〇六 日かけ山さしもかけこしもろかつら落葉をたにもよそに聞哉
七〇七 神山の麓のもりの郭公なれし昔の音にや鳴らむ
七〇八 (統古)神山にゆふかけてなく時鳥しゐ柴かくれしはしかたらへ

七〇九　いくしたつるいほしろ小田のうき草になくやかはつのこゑもすみけり

七一〇　くるゝかとみれは明ぬる山のはにかたふくほとも夏の夜の月

七一一　心あれやさよふけかたのほとゝきすまつになく也玉川の里

七一二　たか香にかはな立花の匂ふらん昔の人もひとりならねは」41オ

七一三　榊とる卯月の後のならのはにまはらに夜半の月ももりけり

七一四　夜もすから涙やそゝく郭公今朝は露けき軒のたち花

七一五　五月こはむろのはやわせ手たまゆらとりあへすなけ山郭公

七一六　時鳥ともに山をやいてつらん雲間の月に一こゑそなく

七一七　なつ山にたれを恋てかほとゝきす声ふりたてゝ夜はに鳴らん

七一八　みしか夜のかねてものうき暁に山時鳥一こゑそなく

七一九　郭公まつとし人やつけつらんいなはの山のみねになくなり

七二〇　時鳥そらにしほるゝ声す也鳥羽田の面の雨の夕くれ

七二一　子規かたふく月ややすらふと有明の雲にしはしかたらへ

七二二　ほとゝきす雲のいつくにやすらひてあけかたちかき月に鳴らん」41ウ

七二三　を山田に引しめ縄のなかき日も猶くるゝまてとる早苗哉

七二四　わきも子かほすまもなしと夏引のいとひやすらん五月雨のころ

七二五　あつまやのかやか軒はもいかならん日数ふりゆく五月雨の比

七二六　おりしもあれすゝしくくもる村雨の雲まにきなく山子規

七二七　をやみせぬよとのわたりの五月雨に雲路夜ふかき山郭公

七二八　袖ぬらすたなかの原のさみたれに光（本ノ）たなきもくちやしぬらん

七二九　新後撰　五月雨のほともこそふれ御芳野のみくまかすけを今日やからまし

七三〇　さみたれは藻塩のけふり立まとひあまのとまやそいとゝいふせき

七三一　哀也こん世そかねてうかひ舟うきてもえ行かゝり火の影

七三二　夏かりの玉江のあしの下かくれたくやほたるのあまのもしほ火」42オ

七三三　夢の世によそへつゝみる朝かほの花の露にそ袖はぬれける

七三四　ゆく螢草のたもとにつゝめとも猶かくれぬはおもひ也けり

七三五　まとのうちにわれはあつめす飛螢もゆるおもひは思しれとも

七三六　夕たちの雲の名残を吹かせにあさの葉なひき露そこほるゝ

七三七　夕立のすきぬる跡の空晴て入日にみかくまつの下露

七三八　雨そゝくはすのうきはにゐる玉のたまらぬものは涙也けり

七三九　やましろのよとののまこも絶〳〵にみたれてやとる夏のよの月

七四〇　きふね川岩うつ波に飛ほたるたかあくかるゝ玉にか有らん

七四一　夏山の峯とひこゆるかさゝきのつはさにかゝる有明の月

七四二　あかなくに雲のいつくにやとりつゝはるれはあくる夏の夜の月」42ウ

七四三　なつの月まつよひなから明にけり岩もる水も結ひあへぬに

七四四　隙もりし玉江のあしはそはたてゝすゝしとやとる夏のよの月

七四五　夏野わけ草のあをはをゆくしかのこゑはほに出ぬ夕暮の空

七四六　をきかさねこほれもやらて白露の秋かせをまつ宮城のゝ原

七四七　みそき川あらふる神やなひくとて今宵そかゝる波のしらゆふ

七四八　けふといへはさはへの神やみそきする河瀬の波に心よすらん

七四九　御祓川かたへすゝしくよる浪に手にとるあさもあき風そふく

（一行分空白）

七五〇　昨日まて忍ふのうらの秋のかせけふあらはれてなみもよせけり」43オ

七五一　さらてたにうらみ侘ぬる夕くれの荻の上葉に秋は来にけり

七五二　いかはかり草はに露のあまるらんすかのあらのに秋たちにけり

七五三　朝またきはとふく秋の音たてゝをかへの松にかせかはる也

七五四　ほにいつるむろのをしねもからなくに山田のいほに秋かせそ吹

七五五　すまのあまの袖にくたけて玉そちる岩うつなみに秋や立らん

七五六　夕されはいなはそよきて吹かせにあしの丸屋をとふ人もかな

七五七　荻原や秋ふくかせやすゝむらん下葉みたれてものおもへとは

七五八　里のあまのたくもの煙心せよ月のてしほの空はれぬ也

七五九　銀河あさせふむまにふけぬとや紅葉のはしをわたしそめけん

七六〇　織女のあかぬ名残の涙にや雲の衣もしほれはつらん」43ウ

七六一　今日までは猶秋かせも忍ふ山した葉そくすにまかふ夕露

七六二　夕されはまのゝ秋かせ吹みたりしつ心なきはきのうは露

七六三　世のうきにおもひとりてし松のとをさすかにあきのたつねきにけり

七六四　葎わけて月もまはらに成にけりまきのふせやの秋のよな〳〵

七六五　さしかへるうちの川長いく秋かしつえにやとる月はみゆらん（本ノマヽ）

七六六　あきといへは野にも山にもすむ月のわか袖にしもしほるらん

七六七　天の原雲吹はらふ秋かせに山のはとをくいつる月かな

七六八　かつきゆるのはらの露にすみ侘て外山にかへる晨明の月

七六九　まれにたにとはるゝ方もなきやとにたか玉章の初雁の声

七七〇　朝霧にやへ山こえてくるかりのつはさ吹ほすみねのあきかせ」44オ

七七一　わくらはにいかにとゝはん人もかな晴ぬ雲ゐの秋そこたへん（と歟）

七七二　飛鳥のあすかのさとの蚕君かあたりの秋やこふらん

七七三　すみそめの袖こそあらめ吹むすふ風はむかしの秋の夕暮

七七四　長夜（続古）もあかすそみつる久かたのあまのとわたるあり明の月

七七五　明ぬるかかせにわかるゝよこ雲のたえ〳〵残る山のはの月

七七六　廻あはん月のみやこはしらねともはかなく契る有明の月

七七七　ふかき山の露の夜すから秋かけてすみこし里は鶉なく也

七七八　秋されははゆる山田のひたすらに世をうきものと思ひわひぬる

七七九　白露の遠方人もとひこなんすそ野をかこふ荻のまかきに

七八〇　我ならてたれかおきゐてこたへましそともの荻のとはすかたりを」44ウ

七八一　小萩原わけゆく鹿の跡よりや下葉の露に月もすむらん

七八二　秋といへはなへての空も色そそふ月のかつらのをのかひかりに

七八三　夜半になくかりの涙はをかねとも月にうつろふまのゝはきはら

七八四　とまをあらみかりほの庵そもる月のなれても袖にぬるゝかほなる

七八五　はまかせにおはなか露はたまらねと真野の入江に月は澄けり

七八六　苔むしろさしては秋のつまやなきもらぬいはやの初雁の声

七八七　難波かた浦こく舟の浪の上にかけすみ渡るあきのよの月

七八八　菅原やふしみの里のさゝまくら忍ひしものを秋の夕くれ
七八九　露しけきむくらの宿のさひしきに昔に似たるすゝむしの声
七九〇　分てなを秋はたもとそしほれそふいつはとわかぬよはのね覚
も」45オ
七九一　長夜をひとりやなきてあかさましとふらふ虫の声なかりせは
七九二　おとろかす野原のむしそ哀なる心にわかぬあきのゆふへを
七九三　たか御祓ゆふかけ草の下露にをりはへてなくきり〳〵す哉
七九四　大江山いく野の道の長夜に露をつくして宿る月哉
七九五　蚤あかつきかたの草のいほに人つてならぬ枕にそ聞
七九六　立帰る浪のゆき来にいろそそふ玉よる浪の秋のよの月
七九七　心あらはよきてふかなん秋のかせ物おもふ人の夜半のね覚を
七九八　淡路島月おちかゝる明かたにこくやみ舟の音そ身にしむ
七九九　夕久礼野曽良田能目瀬伝九留雁遠我於毛婦人戸思波満志。者加
八〇〇　うき事を思ひつらねてなくかりや物思ふ人のね覚なるらん」
45ウ
八〇一　ふかき夜の人さたまれる浅茅生にひとりさひしき庭の月影
八〇二　我宿はつれなき人をまたね共まかきは野へと鶉なく也
八〇三　いつこにか露はたまらん小男鹿のしからむはきもあらしたつ
也
八〇四　住の江のふかき汀による波はいくよの秋の月になるらん
八〇五　さをしかの入野の薄露しけみたか手枕に月やとるらん
八〇六　月影にむしあけのせとをこき出れは八十島かけてをくる鹿の
音
八〇七　露なから袖にくたくるあらし哉物おもふ色はそれとなけれと
八〇八　時しもあれうたて吹そふ嵐哉さらてもふかき袖のおもひに
八〇九　天の戸ををしあけかたの木からしに啼やと山の棹鹿の声
八一〇　昔たれいくよの秋とちきりけんあれたる宿の庭の月影」46オ
八一一　忍山下葉ふくの浦風にうらみかほなるさをしかのこゑ
本ノ
八一二　宮城野の木の下露に色かはるもとあらの小萩あきそ深ぬる
八一三　日くらしのなく夕影の柴の戸をあらしの外にとふ人もなし
八一四　秋の露に袖もくち木のそまかたに道まとふ鹿の声そ身にしむ
八一五　露しけみ草にやつるゝ故郷は袖にそ虫のこゑはみたるゝ
八一六　かつらきや旅ねの月の床きよみよると契し神やくやしき
八一七　雲はれていつれの秋か月はみんおもひつきせぬ宿の夕霧
八一八　鹿のねにかたしく袖やしほるらんこよひもふけぬうちのはし
姫
八一九　ね覚する夜半のあはれをつくせとや秋しも鹿の鳴始けん
八二〇　山里のあはれをそふる村雨にきりの下はも色に出けり」46ウ
八二一　鳴よはるのはらの虫の声きけはわか身の秋そいとゝかなしき
八二二　君すまてとはれぬ秋もふけにけり生田のもりの有明の月
八二三　逢坂の関のゆきゝに色かはるをとはの山の秋の紅葉ゝ
八二四　はつ時雨ふれとかひなき常磐山身にしむ色を風やそむらん
八二五　わきも子か袖ふる山のうすもみちそれかとまかふ秋の夕くれ
八二六　日かすふる紅葉の下の旅衣たつ事やすきにしきなりける
八二七　立田姫をるにしきゝのたもとかも時雨の下の峯の紅葉ゝ
八二八　物おもふ人の袖よりしくれきて色かはり行宿の道芝
八二九　秋ふかき難波のあしのうらかせにこやのしのやも衣うつ也
八三〇　時雨ふるもみちの露にたちぬれてなく音色こき小男鹿の声」
47オ
八三一　かり金のきこゆる空にすむ月の光をうけて衣うつ也

八三二　いなは山松のあらしやさむからん秋のふもとに衣うつなり
八三三　まかちとるふなきの山の夕しくれそむるもみちもこかれてそ
行
八三四　奥山のいはかきもみちいたつらに時雨にそほちおる人もなし
八三五　夜やさむき時雨にきほふ雁金に衣うつ也山のした庵
八三六　ふしわふるしつのまろやの竹すかき夜すから秋の衣うつ也
八三七　おなしくはもみちの露に袖かけて秋のかたみの色を残さん
八三八　きり〳〵す草のやとりのはつ霜にすき行秋やいともかなしき
八三九　秋はつるかれの〻虫の初霜にむすほゝれ行声のはかなさ
八四〇　をく露もあたのおほの〻まくす原恨かねたる秋のくれ哉」47ウ
八四一　露しけきをの〻あさちに鳴鹿の声も夜ふかき長月の末
八四二　玉かつら秋のかたみにたえねとやしほれてそ吹野への木から
し
八四三　むなしくはふかきたのみもかひなきにいかにせんとか秋のく
れぬる
八四四　大空はくれ行秋のかたみかはおしむ袂もうちしくれつゝ
八四五　きえかへりあさちか末の白露に初霜むすふ秋の程なき
八四六　いつ方にかねのひゝきもなりぬらんあけぬかきりの秋の名残
に
（一行分空白）
冬五十首
八四七　山風に紅葉ふりしく道芝の露ふみわけて冬は来にけり
八四八　いつのまに谷の岩まの氷るらん秋は昨日の山川のみつ」48オ
八四九　冬きても猶色ふかしやまかせにちらぬ袂の秋のかたみは
八五〇　神無月しくれてわたる木すゑより雲にわかれていつる月影
八五一　あやなくも露ふきむすふ嵐哉秋のとめたるあたの形見に
八五二　しくれとてこゝにも月はくもるめり芳野の奥もうき世也けり
八五三　かきくもる有明の空のしくるれは月もしほるゝ心地こそすれ
八五四　新千　いかはかり木の葉の色のまさるらん昨日もけふも時雨ふる比
八五五　散かゝる紅葉の雨にまされはや色のみふかきやま川の水
八五六　ものおもふ心や空にくもるらんさも時雨つる神無月かな
八五七　風　神無月雲間まつまにふけにけりしくるゝ比の山のはの月
八五八　立田山みねのしくれの糸よはみぬけとみたるゝよもの紅葉は」
48ウ
八五九　大かたの時雨は人をわかねとも我袖のみそいろかはりゆく
八六〇　晴まなき袖の時雨をかたしきていくよねぬらんうちのはし姫
八六一　あふみのやにほてる月は晴にけりみかみの嶽はなを時雨つゝ
八六二　冬さむみ涙は袖につらゝゐて袂に白きありあけの月
八六三　月もれと嵐のふけるあはらやにあらそふ霜の袖にさえつゝ
八六四　おもへたゝこけの衣に露をきてね覚さひしき冬のよな〳〵
八六五　さえわたる清滝川の岩まより氷にやとるふゆのよの月
八六六　かさゝきの雲のかけはしさえわたり霜をきまよふあり明の月
八六七　風さむみあさゆく道の小さゝはらうきふしことに袖はぬれつ
ゝ
八六八　わ歟　昔とふるきまかきのよるの霜なをきえかへりよひつゝそふ
る」49オ
八六九　霜かれのむくらのかともあけなくに事とふものはあられ也け
り
八七〇　たつた姫ちるやかさしの玉かつらかつらき山にあられふる也
八七一　霜はらふ庭の玉さゝあられふり空さへさゆる冬の夜の月

八七二　けさみれはやたのゝあさちうつもれぬかせもあらちのみねの
　初雪
八七三　ちり残る秋の名残もたえはてぬもりの木葉につもる白雪
八七四　空さゆるひらの高根に雪かけてあられ吹まくかせの寒けさ
八七五　難波かたそよきしあしも霜かれてしほせの浪の音のみそする
八七六　しほれあしのふし葉か下も氷けり一夜二夜のをしのよかれに
八七七　山影やなつみの川にゐる鴨の上毛の霜はきゆるよもなし
八七八　光そふのたの玉川月清み夕塩千とり夜半になく也」49ウ
八七九　雪ふれはみなをしなへて白妙のさきさか山の松ものこらす
八八〇　ゆきつもる旅の家ゐにたつけふりこれも世にふる道やくるし
　き
八八一　さはるへき山路もたえぬ冬籠り菅のねしのきつもる白雪
八八二　今朝みれはならのひろはにふる雪のいとゝさひしきみ山への
　里
八八三　いもかすむ寺ゐの水もこほるらしかちの葉さえてみ雪つもれ
　り
八八四　さしくしのあかつき千とりおきわかれ猶つまこひのこゐ恨也
八八五　かりねする玉江の月のあけ方に声もさやかになく千鳥哉
八八六　ね覚するとふのすかこもさえわひてあかつきふかくちとりな
　く也
八八七　須磨の関有明の月の塩ひかたみきはの千とりとをさかるなり
八八八　今朝みれは雪の白ゆふかけてけりこれや手向の山路成らん」
　50オ
八八九　ふりつもる雪ふきおろす山おろしに山のはしろくさゆる月影
八九〇　かた岡のもりの木からしさえ〳〵てしつくも氷よはの白雪

統後拾
八九一　みかりするかりはのをのゝかせさえてとたちのしはにあられ
　ふる也
八九二　夕暮の空とるたかのすゝの音にゆくゑまよはぬ芝の下草
八九三　山里のすゝきをしなみふる雪にとしさへあやなつもりぬる哉
八九四　身にとまる月日はいつもかはらねとくれぬる年そものはかな
　しき
八九五　我またぬとしさへせめてくれぬるは涙もいとゝふりそほちつ
　ゝ
八九六　いかにせんよそなる春は飛鳥河なかるゝ年はしからみもなし
　恋百首
八九七　いかにせんせけともあまるたもとかないはての山の谷の川
　水」50ウ
八九八　わか恋はまきの尾山の秋の露色に出しとしのひこし哉
八九九　みすもあらすみもせぬ人のゆかりとや夕の空そかたみかほな
　る
九〇〇　かせをいたみしのふのうらによる浪を我のみしりて袖にかけ
　つる
九〇一　せきかへしなをも色にそ出にけるおもひによはる袖のしから
　み
九〇二　忍ひあまり恋に袂はくちはてゝをき所なきわか涙哉
九〇三　おく山のすかの根しのきをく露の人こそしらねきえかへりつ
　ゝ
九〇四　なけきあまり恋(ママ)にたもとはくちはてゝをき所なきわか涙哉
九〇五　くちねたゝあやめてとはん人もあらし忍の山のたにの埋木
九〇六　大空にいかにまかへんもしほやくあまたにつゝむこひのけふ
　りを

九〇七　あふ事はとを山鳥のをのれのみなかき恋路のためしとそみる」51オ

九〇八　としふともしらしな心あまをふねかまのほなはのたえすこふると

九〇九　我恋はいそまをわけていさりふねほのかにかよふ浪のまもかな

九一〇　命あらはめくりあひなんひたち帯結ひそめてし契くちすは

九一一　下紐のむすほゝれゆくうらみかなゆふてもたゆくとけぬ思に

九一二　統後拾久かたの日影のかつら手にかけて心の色をたれにみせまし

九一三　あふ事のかたみのうらのうつせかひむなしきこひの絶ぬ年のを

九一四　つくはねのみねはや人のつらからん衣手かれてひとりぬる夜を

九一五　はるしこはつらき心もとけなゝんうら山しきはけさの池水

九一六　夏むしの身よりあまれるおもひかはあはてきえめやなみのうたかた

九一七　みちをなみ山したしけき夏草のしらぬ恋路も露そこほるゝ」51ウ

九一八　逢みても夢かとおもふうたかひにうつゝなからもなをやうらみん

九一九　つれなさをうらみもあへすふくるよにすゝむるものは泪也けり

九二〇　いかなれやちきりし色はそれなからわかかねことのはてそかなしき

九二一　むつこともあふ人からのならひかもいつらは夜半もなか月の空

九二二　おもひかねなく〳〵わけし白雲の忍ひし中を何へたてけん

九二三　あま人のをのれけふりとなりしよりみるめはたえぬ塩かまの浦

九二四　我為はつらき心のおくの海のいかなるあまのみるめかるらん

九二五　さても猶面影たえぬ玉かつらかけてそ恋るくるゝ夜ことに

九二六　君こふる涙や空にかよふらんおもひはてける夜半の村雨

九二七　かるかやのみたれてものをおもへとも君か下葉の露そつれなき」52オ

九二八　くやしくそたのむもつらしみつの泡の消て留らぬ人の情を

九二九　恋せよとなるみのうらの塩干潟かた思にそしほれわひぬる

九三〇　あふ事のまとをの衣名につらししほれ侘ぬる須磨の浦人

九三一　恨わひさてもたゆまんかたもあらしあはてへにける年のしるへに

九三二　袖のうへに秋をく露の玉すたれかけてこふるを知人のなき

九三三　野分せし昔の秋のゆふへより面影さらぬ山のはの月

九三四　そのまゝに涙の露もをきかへすありしなからのつけのを枕

九三五　たのめても心つくしにふけぬなり待よるすくと君につけこせ

九三六　ふけにけり中〳〵なにゝたのみけん人の契りも浅茅生のやと

九三七　袖の上にむすほゝれ行なみた哉軒はの荻のちきりはかりに」52ウ

九三八　わするれとちきりしほとの夕くれは松吹かせそかたみかほなる

九三九　まとろまて月にあかせる夜ころ経て夢路もうとき人の面影

九四〇　なをさりの遠方人やはらふらんあはてくるよの道芝の露

九四一　かくしつゝいつかとくへき下ひものむすひもをかぬ人の契に

九四二 恨侘てさてもあはせん人もかな夢よりけなるあたの契を
九四三 さても猶たえぬ契をたのむ哉おもひ忍ふのもりのしめ縄
九四四 我涙しくれとともに故郷のあさちかもとをとふ人もかな
九四五 玉をなす涙の露の袖のうへにをきてけぬへき朝ほらけ哉
九四六 御垣守衛士のたく火はよそなれととへかし人のもゆるおもひを
九四七 女郎花はなのたもとに露をきて誰夕くれの契まつらん」53オ
九四八 恋すてふ名のみたかしの浜千鳥なく〳〵かへる袖のあた浪
九四九 おもへたゝ逢夜まれなる明くれに露きえわひし人の面影
九五〇 つらけれとさすかにかよふ心哉身をうちはしの中もたえなは
九五一 おもひねの夢のしるへのはかなさをたのむ程なるなくさめもかな
九五二 今日もまたならのを川にみそきしていのりやせまし人の契を
九五三 君かためふかきおもひやとふ鳥の声も聞ぬ山のはの月
九五四 袖のなかに人のなこりをとめをきて心もゆかぬしのゝめの空
九五五 恋わひてねもやしなましむは玉の夢にたのめし人や待らん
九五六 おもひ入こひの道芝秋すきてとはてかれぬる草の原哉
九五七 霜こほりあられみたるゝ冬のよを君きまさねはこひつゝそぬる」53ウ
九五八 たのめこし有明の月のそれなからおなし袖にもめくり来にけり
九五九 かはらしといひしし為柴いかならんよもの山辺も時雨ふるころ
九六〇 谷ふかくたつをたまきの心地しておもひも袖も朽や果なん
九六一 うきしつみこふるもくるしみたれ芦の末こす浪のしほれ侘つゝ
九六二 ぬる夜なき心のとかに年を経て夢の契りもいくよへたてつ
九六三 ともねせぬかものうは毛のよるの霜おきあかしつる袖をみせはや
九六四 恋わふる涙にくもる秋の空みしやその夜の月なへたてそ
九六五 あちきなくなかきかたみのつらさゆへ君にとめてし我心かな
九六六 人しれす我身にしむるゆふくれをしらすかほにや君なかむらん
九六七 なけきつゝねぬよの空の月影を恋しき人のかたみにそみる」54オ
九六八 又ねしてあかぬ名残をみる夢に二たひ袖をぬらしつる哉
九六九 晨明のつれなくみえし空のみやなれし名残のかたみ成へき
九七〇 恋すとて袖には雲のかゝらねと涙の雨はをやみたになし
九七一 あふ事のかたむすひなる白糸のとけぬ恨も年そへにける
九七二 菅枕たまちる閨のそての上にぬるゝかほなる床の月影
九七三 わきも子かゆへのつましくさしもやはつれなき人を思わたらん
九七四 恋衣しほる涙の手をたゆみしはしたゆまんそてのまもかな
九七五 明かたをしらするとりのつらさゆへ我なみたさへせきそかねぬる
九七六 逢てもいつれを夢とわかぬまに泪くたくる床のさむしろ
九七七 秋かせになひくさ山のくすかつらくるしや心うらみかねつゝ」54ウ
九七八 かせの音のそれかとまかふ夕暮の心のうちをとふひともかな
九七九 おもひ草葉すゑも今は霜かれて秋の末はの人のおもかけ
九八〇 かせのをとのためしくれにゝたる哉おもひ絶にし庭の荻原

九八一　うき人をしのふの衣あらきなくつれなき色に何みたるらん
九八二　もろかつらかけてやとふと待わひぬはかなき草の名を頼つゝ
九八三　契りさへ浅沢ぬまのかきつはたへたて出ぬる名こそつらけれ
九八四　衣〳〵の人の別の明くれをむすひもとめぬ道芝のしも
九八五　我恋は色もかはらすしからきのまきのそま山時雨ふれ共
九八六　あふ事も今ははつかの山のなも我身ひとつにふくるよのつき
九八七　恋て鳴もりのうつせみ木かくれて下葉の露をののれやはけつ」55オ
九八八　わするなよけふは昔の秋までもこの夕暮の荻のうはかせ
九八九　ふみわけしあとをかたみのにはつ鳥かけのなかおのみたれてそ思
九九〇　たのめをきし露のやとりをわけわひて君にそまとふ道のさゝ原
九九一　逢みてし人をしのふにをく露はわすれかたみの涙也けり
九九二　暁のわかれは袖にふかきより行もとまるも露こほれつゝ
九九三　俤をいくよの月に残すらんつれなくみえしひとのなこりに
九九四　身にちかき我みの秋をなけくまに木葉さへこそ色かはりゆく
九九五　思出るまかきの菊もおり〳〵はうつろひはてし秋の契を
九九六　わすれゆく人の心をなけくまに我袖さへも色かはりけり
（一行分空白）」55ウ

雑百首

九九七　統古　かこの島松原こしにみ渡せは有明の月に田鶴そ鳴なる
九九八　初瀬山入あひの鐘の声すみて檜原かすゑに雲そかゝれる
九九九　おほ空は時雨ぬ春もあるものをいつも秋なるわかたもと哉
一〇〇〇　きえやらて波にたゝよふうた方のよるへしらせよ八重の塩風
一〇〇一　世中は如何たのまん飛鳥川昨日のふちの浅せしらなみ
一〇〇二　よふねこくふち江の浦のあり明に浪路を送る月のさやけさ
一〇〇三　それとなく思いつれは袖そぬるゝすきにしかたの夕くれの空
一〇〇四　稀にあくる松の戸ほその明方にみし世にたる月をみる哉
一〇〇五　山ふかみその名もしらぬときは木のしけき峯にも月は澄けり」56オ
一〇〇六　いそのかみふるのゝさはのまろ木橋くちぬるものはたもと也けり
一〇〇七　塩かまのうらこくふねのつなて縄くるしきものはうき世也けり
一〇〇八　みさこゐるいそまの松のふかみとり色もかはらぬおきつ塩風
一〇〇九　こきちらす滝の白玉からねとも涙はつきぬものにそ有ける
一〇一〇　山さとのまきのいた橋あれはてゝとはれぬ程も余所にみゆらん
一〇一一　芳野山。岩のかけみちわけいらはいかはかりなる露のをくらん
一〇一二　かり人のいるのゝ草やふかゝらんなひくゆすゑのかけそ行かふ
一〇一三　けふもくれあすもすきなはとおもふまにむなしき年の身につもりつゝ
一〇一四　山もとの松の験もためのめをり誰かはとはん三輪の夕くれ
一〇一五　すまの関たれしのへとか浜千鳥ゆくゑも知ぬあとの月影」56ウ
一〇一六　うちはへて波まになひくはすなはの恨てかひの有世也せは

一〇一七　すてやらぬうき身のはてのかなしさをなけきながらも猶すこす哉

一〇一八　なさけあらは四方のかたより吹かせのつてを尋てとふ人もかな

一〇一九　大かたのうつゝは夢になしはてつぬるかうちには何をかもみん

一〇二〇　なけき余りをき所なきうき身哉袂は露のやとりなれとも

一〇二一　奥山のをのかふもとをまかきにて岩かきし水庭にせくかな

一〇二二　岩ねふみわけこし峯のかたみとやかさぬる山にかゝる白雲

一〇二三　露なからたか（本ノ）はかりしきさぬる夜は夢も旅ねの床やみゆらん

一〇二四　かきくらす野山の雪はきゆれとも身のおもひこそ年つもりけれ

一〇二五　いさこゝにわか世はへなん久かたのかつらの里の月のよな〳〵」57オ

一〇二六　玉もかるしきつの浦のたひねには磯の松かせ身にやしむらん

一〇二七　ありしにもあらすなるよの験とやまつ色かはるこけの袖哉

一〇二八　故郷もとを山すりのかり衣いく朝露をそてにかくらん

一〇二九　枕とて草ひき結ふ宮木のゝ秋とたにやは月もたのまん（か歟）

一〇三〇　いへはえにかはらぬ月そうらめしき我のみふるきこけのたもとに

一〇三一　露しけきのしまか崎のたひねには浪こさぬよも袖はぬれけり（続後拾古）

一〇三二　人はみなもとの心そかはりゆく野中の清水たれかくむへき

一〇三三　から錦たれかたむけし色なれや紅葉のぬさの秋の山みち

一〇三四　山ふかみまきの戸たゝく木からしに泪のこらぬ床のさむしろ

一〇三五　物おもへとなるみのうらの浜楸ひさしくなりぬうき身なからに」57ウ

一〇三六　くものなみけふりの波路へたつともとへかし人のおもふかたより

一〇三七　あさりするたゝなし小舟こきかへりえしまか磯はあかすかもみん

一〇三八　松島のあまのとまやはしらね共我袖のみそしほれ侘ぬる

一〇三九　わか心なくさめかねていくよへぬをは捨山の月はみねともと

一〇四〇　そての名になれてもかなし奥山の松のは分の有明の月

一〇四一　ふれはかく涙もいとゝふかき夜のまとうつ雨は袖にかけねすみわひて爪木こるへき宿ならはさひしさのみはなけかさらまし

一〇四二　住吉の八十島遠くなかむれは松のこすゑにかゝるしら浪

一〇四三　山さむみかせもさはらぬこけむしろ立ゐにつけて袖そぬれこし

一〇四四　身のうきをなけくあまりの夕暮に問もかなしき磯の松かせ」58オ

一〇四五　さゝめかりのはらの露にさぬれつゝこひの衣のおもかけそたつ

一〇四六　うかりける世にすみかまのうすけふりたえみたえすみもの思ふ比

一〇四七

一〇四八　山路をはまた夜ふかくそ出つらんあくれはくたるうちの柴舟

一〇四九　かせはやみ浦にたゝよふうきふねの定めなき世を何したふらん

一〇五〇　しつのめかあれ田のくろにこせりつむあさの衣もかくはしほれし

一〇五一　とまりするあまのもくつに引とまの隙なく物をおもふ比哉

一〇五二　いく夜われうらはの浪にそほつらんあまのなはたきいさりせね共

一〇五三　おきつ島あまの磯屋の藻塩草かく数ならてよをやつきなん

一〇五四　いつくとも昔の庵の跡ならんよをうち山の秋のゆふくれ

一〇五五　故郷にとめてもみせんと思ひしを袖にも月そかき曇にし」58ウ

一〇五六　うき舟のこかれてわたる浪のうへによるへしらせよ沖津塩風

一〇五七　松の戸やさしも夜ふかきかねの音に涙の露のをきあかしつゝ

一〇五八　まつかきのましはのとほそあけくれはおもひみたれてよをやつくさん

一〇五九　大方に人をはわかぬかせの音もやとからつらき山の夕くれ

一〇六〇　我おもひつもり〳〵てあらたまのとしをあまたもなけきこし哉

一〇六一　いつとなきをくらの里に心あれやくれぬといそく山のはの月

一〇六二　久堅の空もあはれとてらさなんあふくかひなく年のへぬれは

一〇六三　いとゝしく物おもふやとの道芝に露をきそふるよはの村雨

一〇六四　奥山のいはねにたゝむ苔むしろたかしきすてし名残成らん

一〇六五　なけきあまりいく世のとしをせめきけん夢の内なる夢をみしまに」59オ

一〇六六　水草。―ゐて月さへすまぬ故郷の岩もるしみつけふやくまゝし

一〇六七　おいにけるすかたの池のうきぬなはくるしき世をそおもひわつらふ

一〇六八　笠ゆひのしまこきわかれこく舟の跡ゆく波のあはれ世の中

一〇六九　花の色とりのこゑにもなくさますうき世をさとるかりのやとりは

一〇七〇　くやしくそあたのすさみに年を経て仏のみちになをやたとらん

一〇七一　そむけともかことはかりのこけの袖心をそむるなくさめそなき

一〇七二　誠には仏の国もよそならすまよふかきりそうきよともみる　統古

一〇七三　夕まくれのりの山田もひたはへていのちもしかとおとろかすとも

一〇七四　なにとなくなにとかしのふ徒に思もをかし露のよの中

一〇七五　みる程もしはしなくさむ隙もかなあらしも月もつねならぬよに」59ウ

一〇七六　世中のつねなき色をしれとてや露のやとりに月もすむらん

一〇七七　ひとりきく暁のかねのつく〳〵とおもふねさめそ夢には有ける

一〇七八　にしへゆく心の月のしるへあれとまたはれやらぬ雲そかなしき

一〇七九　燈のつくるをきはにおきゐつゝこの世を草（夢歟）とさとり行かな
一〇八〇　をろかなる心のうちをたつねみよほかに仏のみちしなけれ
　　は
一〇八一　いとふなよくるしきうみによる波もみのりの仏（船歟）のほかにや
　　はたつ（統古）
一〇八二　おもひとけは心につくる六のみちをいとふそやかてまとひ
　　也ける
一〇八三　あきらけき道にもいかてさとりいらんまたふかき夜の夢の
　　行末
一〇八四　入月にあふきをあけてたとふれとうきよのやみそかこつか
　　たなき
一〇八五　空にかふ身のをこたりのつれなさをなけき〳〵のはてをし
　　らはや」60オ
一〇八六　もろ神をたのみしかひそなかりけるゐてのしはらそ手には（からみイ）
　　くまねと
一〇八七　いにしへのなけきのもりの名もつらしわかねきことの神の
　　みつかき
一〇八八　神風やとにさかのほるあさ日影くもりはてぬる身を歎つゝ（ママ）
一〇八九　哀しれ神のめくみはしらねともいせまてなをもかくるたの
　　みは
一〇九〇　おりしかんたひねもつらし浪まくら名はむつましきいせの
　　浜荻
一〇九一　おもひいつる袖にそ影はやとりけるその神山の有明の月
一〇九二　住吉の神の験しも頼め共心のうちのまつは年経ぬ
一〇九三　あまくたる神もあはれとみつの浜心のしめをかけてたのま
　　ん
一〇九四　かはらしとたのみし物を足引の山のみなみのまつかせのこ
　　ゑ
一〇九五　たのみこししるしもいかゝ岩しろの野中の松にむすふ恨
　　を」60ウ
一〇九六　わかたのむ御法の花の光あらはくらきにいらぬ道しるへせ
　　よ

印本是迄アリ（貼紙）
（九行分空白）」61オ
（半丁空白）」61ウ

〔今回より山本と佐藤（大阪大学大学院）の共同作業によって翻刻を行なう。〕